

わが道を歩む 池田草庵

養父市八鹿に風格のある木造の建物があり、「青谿書院」とすみで書かれた看板が入り口にかかげられている。但馬聖人と呼ばれた池田草庵の私塾あとだ。

草庵が、三男として但馬国宿南村（現在の養父市）に生まれたのは一八一三（文化十）年。母を亡くして満福寺にあずけられたのは十才の時だった。そう明でまじめな性格が、修行への熱心な取り組みを支えた。その向学心の高さを見こんだ寺の和尚は、いずれ草庵を自分の後継い者にしようと決めていた。僧りよになることがこの時点での草庵の宿命だった。

草庵十八才の時のことである。ちょうどそのころ相馬九方という儒学者が但馬に来ていた。草庵は、九方先生のもとで漢文を学ぶように和尚にすすめられた。そこで熱心に学んだ草庵は、人間の生き方を考える儒学にみ力を感じ、その学問の世界に入りこんでいった。この時から草庵のなやみが始まった。寒さの厳しい但馬の冬。まだ、夜も明けきらない満福寺の本堂で、草庵は一人ゆかをみがいていた。水に雑きんをひたすと、その冷たさに指先がしびれる。本堂の板間を心をこめ、丁寧にふきながら、ふと、手を休めて思いにふける草庵であった。

また、いつもの難題が頭の中をめぐりはじめた。

「私は、どうしたらいいのだろうか……。」

思わずそんな言葉が口をついて出た。このまま和尚の期待にそって僧りよの道を歩むのか、自らの道を自分で決めて儒学の道へ入って行くのか。

そんな時、九方先生が京都へ去ることになってしまった。草庵は九方先生のもとで儒学を学び続けたという気持ちがあざざざんふくらんでいった。

草庵は、思い切って和尚に儒学の道に進みたいと申し出た。だが、当然のことながら和尚は反対した。和尚の態度はおだやかではあったが、厳として許さないという意志が草庵に伝わった。草庵は、自分の生きる道に、大きな判断をせまられた。今日まで育ててくれた和尚への恩を思えば、これまで通り僧りよとしての道を日々努力しながら進むべきだろう。しかし、儒学の教えは自分の心に深く通じる。このことをおさえこんで生きていったら、きっと後かいるだろう。今は若い若いが年老いてから、自分の判断が誤っていたと気づいたとしても取り返しがつかない。

草庵のその思いは、日増しに強くなっていった。

しかし、和尚の許しが出ることは絶望的と言ってよかった。

「私は、儒学を学びたい、しかし……。」

暗い本堂にろうそくのほのおだけが細く小さく灯っている。ゆらゆらとたよりなくゆれる光は、草庵の今の心のゆれのもようであった。

本堂の外が白み始めるまで、ろうそくのほのおを見つめる日が続いた。草庵は、自らの心のゆれに、もはや結論を出さなければならぬと感じていた。

しもの降りた寒い日の明け方のことだった。

「和尚様、お許しください。」

草庵は、閉ざされた寺の門に向かつて深々と頭を下げた。かさのひもを結び直す草庵の口元はぎゅつと結ばれていた。何度もふり返ったあと、草庵は何かをふり切るかのように小走りにかけて出し、京都へ向かった。

京都で九方先生の塾生となった草庵は、苦勞をしながら儒学を学んだ。どんなに学問を続けることが苦しくて、満福寺を去ったという自らの決断を支えとして、草庵は学問にはげんだ。

しかし、草庵の心のおくには、

「私は、和尚様の許しを得ずに、だまって寺を去ってしまった。和尚様に対して、人として許されないことをしたままである」という思いがあり続けた。

二年ぶりに但馬に帰郷した際、草庵は和尚にわびに行つたが、会つてはもらえなかつた。

「和尚様が会つてくださらないのは、仕方のないことである。」

そうつぶやきながら、草庵は、人として和尚様に認められるようになることを自らにちかつた。

さらに二年の歳月が過ぎ、再び満福寺の門をたたいた草庵を一目見た和尚は、門前に立つ草庵の姿から感じられる誠意ある人がらに感心し、ついにかれを許した。

「何も言わんでよい……。」

おだやかな笑顔で和尚に声をかけられた草庵のほおには、一筋のなみだが流れた。

草庵が京都に向かうことを決断したあの日から、四年の歳月が流れていた。

再び師弟として心を通じ合わせた二人は、和やかに語り合った。

「ありがとうございます。」

草庵は、寺を立ち去る時、もう一度寺の門をふり返って、深々と頭を下げた。

京都で学問を深めるうちに、草庵の評判は故郷の人々にも知られるようになった。地元の若者たちをぜひ導いてほしいという熱心な依頼に、草庵は但馬にもどった。

その後も草庵は、「慎独」という言葉に象ちようされる「自律」の心を大切にした生き方をつらぬきながら、私塾「青谿書院」を開き、全国から集まった多くの若者に教えを説いた。塾生からは、近代日本の政治や教育の発展に寄よした多くの人材をはい出した。

「但馬聖人」という呼び方には、学者としてだけではなく、草庵の生き方をもたたえる思いがこめられている。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複製して使用することを禁止します。